

アメリカにおけるコミュニンの系譜

—「ヘリコン・ホーム・コロニー」理解への手がかりを求めて—

中島 祥子

はじめに

1906 年に『ジャングル』(*The Jungle*) を発表し、マックレイカーとしてその名を広く知られるようになったアプトン・シンクレア(Upton Sinclair, 1878-1968)は、90 年の生涯を終えるまでに 80 作以上の作品を世に送り出している。また同時に、シンクレアにはコミュニンを組織し、運営した経歴もある。「ヘリコン・ホーム・コロニー」(Helicon Home Colony: 以下「ヘリコン」と略記)である。だが、「ヘリコン」は開設後半年で火災により消失する。火元が「ヘリコン」内部にあったのか、放火によるものだったのかは明らかにされていないが、このコミュニンの真の姿を知る手立ては、現在のところシンクレア自身が書き残した作品しかない。それは『自伝』(*The Autobiography of Upton Sinclair*, 1962)と『アピール・トゥ・リーズン』誌(*Appeal to Reason*)に掲載された『ブラス・チェック』(*The Brass Check*, 1919)の第 11 章である。内容については以下で詳述するが、この二つの作品の記述を見ると、それ以前に存在したコミュニンと「ヘリコン」との間には何らかの相違があるように思える。この論文では、「ヘリコン」を正しく理解するための前段階として、アメリカにおけるコミュニンを概観することを主たる目的としたい。

ヘリコン・ホーム・コロニー

シンクレアは「ヘリコン」創設 6 年前の 1900 年に、厳格なピューリタンであった母の友人の娘メタ・フラー(Meta H. Fuller)と結婚する。当時まだ作家と

して成功をおさめていなかったために妻を養う経済的余裕はなく、周囲の人びとはシンクレアにしきりに別の職を探すことを勧めたという。しかし作家としての道を歩み続けて譲らず、金儲けのためのお粗末な作品を書いては生活費に充てるというその日暮らしをしながら、自分自身が本当に書きたいものを執筆し続けた。

二人は医者への助言に基づいてパース・コントロールを試みるが、思いがけず子どもを授かることになった。妻の出産はシンクレアにとって大きな衝撃であったようで、再び妊娠した場合、執筆活動に支障を来すと考えたシンクレアは、お互いに独身状態を守るべく妻に申し出る。

メタが普通の新婚生活を望む一方、シンクレアは執筆活動に専念するというアンバランスな夫婦関係を維持することになったが、運良く『ジャングル』がベストセラーとなる。その印税、3万ドルを投資して1906年に開設したのが「ヘリコン」であった。ニュージャージー州エングルウッド(Englewood)の街を見渡せる小高い丘の上に開設されたこのコミュニオンは、男子校として使われていた廃校を利用して作られ、熱帯植物の生い茂るガラス張りの中庭や噴水、ボーリング場やビリヤードルーム、テニスコートまでが完備されていた。

コロビア大学教授で哲学者のW・P・モンタギュー(W. P. Montague)夫妻、スウェーデンの作家であるストリンドベリ(Johan August Strindberg)の翻訳で知られるエドウィン・ビョークマン(Edwin Bjorkman)夫妻、後にカトリック系の機関誌『カモンウィール』(Commonweal)の編集者となるマイケル・ウィリアムズ(Michael Williams)、後にノーベル文学賞を受賞するシンクレア・ルイス(Sinclair Lewis)などがこのコミュニオンに参加した。また、哲学者で教育者のジョン・デューイ(John Dewey)や小説家ヘンリー・ジェイムズ(Henry James)の兄で哲学者、心理学者のウィリアム・ジェイムズ(William James)などはたびたびここを訪れた。文化人が多く集まるこのコミュニオンでは、互いの仕事を邪魔しないよう、プライベートな空間には相手からの誘いがないかぎり入ってはいけないというルールが遵守されたが、他にはこれといった規則は存在しなかった。

シンクレア自身が『自伝』で述べているように、「ヘリコン」最大の成果は育児問題であった。コミュニオン内には14人の子どもがいたが、彼らの日々の生活は育児専門家の手に委ねられた。育児専門家を獲得するには人数の面で困難を伴ったために、専門家のいない時間は母親が交代で面倒を見ることになっ

ていたが、こうすることで子育ての時間を最小限にとどめ、解放された女性たちは自由な時間を手に入れることが可能となったのである。

シンクレア自身は、「ヘリコン」での生活の最中に『産業共和国』(*The Industrial Republic*, 1907)を発表して作家活動も順調であったが、すでに述べたように、翌年の1907年に原因不明の火災により建物が全焼してしまった。これによって「ヘリコン」はわずか6ヵ月足らずで消滅したのである。

『ジャングル』を発表したことでマックレイカーとして、あるいは社会主義的作家として知られるようになったシンクレアが、もっぱら社会改革のためにコミュニオンを建設したというのなら自然であり、納得がいく。しかし妻メタとの結婚生活やシンクレア自身の執筆活動を考慮に入れると、単に社会改革の試みとして「ヘリコン」を開設したのではないように思えてならない。この点については、中田幸子が『アプトン・シンクレア — 旗印は社会正義』(1996)のなかで「理想社会の具現化としてのコロニーに対する彼の情熱が察せられるが、同時に、フェミニストで社会学者のギルマンの考えに接して、当面の個人的な家庭問題を解決し、育児・家事と仕事を両立させようとした」(53)と指摘しているように、頷けるものがある。

またニューヨーク市立大学のローレンス・キャプラン(Laurence Kaplan)は、学術雑誌『アメリカン・スタディーズ』(*American Studies*, 25, No. 2, 1984)に掲載した論文‘A Utopia during the Progressive Era: the Helicon Home Colony’において、このコミュニオンの位置づけを“In essence, the community established in Englewood by a group of Progressive era intellectuals represented an innovate solution to problems connected with child care and homemaking” (60, *Italics mine*)としている。

シンクレア自身は、先にあげた『プラス・チェック』の第11章の冒頭で以下のように述べている。

I proposed that a group of forward-looking people should get together and establish what might be called a *home-club*, or a *hotel* owned and run by its guests. *There was nothing so very radical about this idea*, for up in the Adirondacks are a number of *clubs* whose members rent cottages in the summertime and eat their meals in a *club* dining-room. (*Italics mine*)

世間一般がヘリコンをコミュニオンと捉えていたのに対して、シンクレア自身は“home-club”や“hotel”、あるいは“club”といった表現を用いている。また、「ヘリコン」のような共同生活の場を構想することは決して急進的な考えではないとも言っている。さらに1962年に発表した『自伝』にもヘリコンに関する記述が見られる。

His plan was to establish a *co-operative home*, to demonstrate its practicability and the wider opportunities it would bring. *There was nothing revolutionary about this idea*; it was being practiced in many parts of America. (128, Italics mine)

ここでもやはり「ヘリコン」というコミュニオンを設立することは決して革命的なことではないと述べている。シンクレアが「ヘリコン」を「参加者自身が運営するホテル」としていることから、彼の頭の中にあるコミュニオンと一般的にいわれるコミュニオンには概念上のずれがあるように思える。コミュニオンの定義については以下で述べることにするが、シンクレアの構想したこのコミュニオンとはいかなるものであったのか。彼が考えるコミュニオンと一般的に言うコミュニオンにはどんな類似点、あるいは相違点があるのだろうか。それらを見出すためにも、アメリカのコミュニオンを概観してみる必要がある。

コミュニオンとは？

ではコミュニオンとは一体どのようなものなのだろうか。『参加と共同体』(*Commitment and Community*, 1972)の著者ロザベス・モス・キャンター(Rosabeth Moss Kanter)の考え方を、村田充八はその著書『コミュニオンと宗教 ― 燈園・生駒・講』(1999)で次のように解説している。

コミュニオンにおいては「私的所有」は否定され、すべてのものは成員に平等に分配され、(1)「兄弟姉妹」(brotherhood)の関係が強調される。また独自の信念体系や儀礼的实践をもち、被抑圧者集団としてその内部に新しい社会の建設を夢見ながら、理想を目指すというユートピア的色彩が濃い。そのため、コミュニオンは、しばしばユートピアと

同一視される。コミュニオンはまた、社会的または人間的な不調和、葛藤、緊張を超越した(2)「完全な人間になること」(human perfectibility)を目標としている。そのコミュニオンの集団は、混乱し一致のないこの世の社会に対し閉鎖的でありながら、一方において、共同体そのものの(3)「秩序(order)、統制(control)、意味(meaning)、目標(purpose)」を重んじる。コミュニオンには、これらの理想の実現のため、この世を社会的に改革しようとして、ラディカルな行動をとるものもある。他に、コミュニオンは(4)「身体と心の一致」(unity of body and mind)を追求し、健康食品や民間療法の開発などに関係した(5)「生活の実験」(experimentation)を常に試みようとする。そのメンバーは、自らをコミュニオンに属するものとして強く意識し、外集団にたいしては自らの(6)「集団のユニークさ」(the community's uniqueness)を強調する。コミュニオンは、これらの諸特性(1)~(6)すべてを統合して意識的に実践し、最終的に、自然との調和、人々との調和、心と身体の調和を目指す。コミュニオンの成員は、また一人のカリスマに帰依して、その人物を中心に集合していることが多い。(51-2)

アメリカには建国時から現在に至るまで、こうしたコミュニオンが次々と発生しては消滅している。社会学者でコミュニオン研究家のロバート・S・フォウガティ(Robert S. Fogarty)によれば、1787年から1860年の間に137個のコミュニオンが、そして1861年から1919年の間には142個のコミュニオンが建設されたという。このようにコミュニオンを志向する人びとは数多くの試みをしてきたわけで、その中には「ヘリコン」と同じように短期間で終わるものもあれば、現在に至るまで続く長寿のコミュニオンも存在する。なぜこのようにアメリカ国内にさまざまなコミュニオンが頻繁に建設され、また消えていくのだろうか。

文学とコミュニオン

人びとがコミュニオンを作るその目的とは一体何なのだろうか。非宗教的なコミュニオンの場合、既存の社会や体制に不満を抱いた人びとが自らの理想とする社会、つまりユートピアの構築を目指して共同生活を始めることが多いのである。

例えばイングランドの空想的社会主義者であるロバート・オーウェン (Robert Owen, 1771-1858)がインディアナ州ウォバッシュ(Wabash, Indiana)に建設した「ニュー・ハーモニー」(New Harmony)は、彼の著書である『新社会観』(A New View of Society, 1813)に著された理念を実践するためのコミュニティであった。この地所はもともとジョージ・ラップ(George Rapp, 1757-1847)率いる「ハーモニー・ソサイエティ」(Harmony Society)のものであり、そこを譲り受けて設立したのだった。

オーウェンをコミュニティ建設へと導いたのはロマン派の詩人サミュエル・テイラー・コールリッジ(Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834)であった。イングランドのマンチェスター(Manchester)にある「マンチェスター文学哲学協会」(Literary and Philosophical Society)に籍を置いていたオーウェンは、その会を通じて彼に出会った。コールリッジはジョージ・ワシントン(George Washington)や、アメリカ革命をあおるパンフレット『コモン・センス』(Common Sense, 1776)を発表したトマス・ペイン(Thomas Paine)に心酔し、専制君主のいないアメリカに憧れてユートピアの建設に乗り出した。そして彼に賛同したロバート・サウジー(Robert Southey, 1774-1843)ら数人の詩人仲間と共に構想したのが、「パンティソクラシー」(pantisocracy)という名のユートピアであった。ジャーナリストのエリナー・ホーウィッツ(Elinor Horwitz)はコールリッジの考え方から「パンティソクラシー」を次のように紹介している。

A pantisocracy was, according to Coleridge, the opposite of a democracy. In a democracy, he explained, everyone was dragged down to the level of the lowest savage. In a pantisocracy everyone would be raised up to the level of the most intelligent and aristocratic members. (75)

このユートピアを建設するための具体的な場所も決まっていたが、実行に移す際に誰がアメリカに渡るかで仲間割れをし、計画は白紙となってしまった。コールリッジの夢は実現しなかったものの、この話に感銘を受けたオーウェンはコミュニティへの憧れを募らせ、「ニュー・ハーモニー」を建設するに至ったのである。

コミュニオンがよくユートピア思想と結びつけられることがあるが、これはコミュニオンを志向する人たちの多くが理想とする社会と一連のユートピア小説に描かれる社会に共通するものがあるからと考えられる。ユートピア小説といえればトマス・モア(Thomas More)の『ユートピア』(*Utopia*, 1516)、サミュエル・バトラー(Samuel Butler)の『エレフオン』(*Erewhon*, 1872)、エドワード・ベラミー(Edward Bellamy)の『かえり見れば』(*Looking Backward, or 2000 - 1887*, 1888)、あるいはウィリアム・モリス(William Morris)の『ユートピア便り』(*News from Nowhere*, 1890)などが挙げられる。

これらのユートピア小説を基にして実際にコミュニオンを建設した例もいくつかある。前述のようにオーウェンは自身の著書で述べた理念を「ニュー・ハーモニー」で実践したし、フランスのエティエンヌ・カベール(Étienne Cabet, 1788-1856)が試みた「イカリア」(Icaria)もその例として挙げられる。「イカリア」はカベールの著書『イカリアへの旅』(*Le Voyage en Icarie*, 1840)を出発点とするコミュニオンである。このユートピア小説には人々が平和で豊かに暮らし、君主や階級差別も、不平等な税金もない、全ての男性に選挙権が約束された「イカリア」というユートピアが描かれている。小説のベストセラーをきっかけに「イカリア」の実現を目指そうと決めたカベールは、オーウェンに会いにイングランドへ向かった。そして彼がかつてテキサスにユートピアを建設しようとしていたことを聞くとすぐに、仲介者を通して、日本の総面積の約1.8倍にも及ぶ広大なテキサスに100万エーカーの土地を購入した。

カベールは1848年に仲間の社会改革者と共にフランスを後にするが、テキサスに到着した彼らを待っていたのは100万エーカーではなく、わずか1万240エーカーの土地だった。しかもやせた土壌であったために、その場所を手放し、新たにイリノイ州ノーヴー(Nauvoo, Illinois)にあったかつてのモルモン教徒の拠点を購入してそこにコミュニオン建設を試みた。建物や土地がすでに整備された場所にコミュニオンを作る方法は、ジョージ・ラップから「ハーモニー・ソサイエティ」の土地を購入したオーウェンに倣ったものであった。

こうしたコミュニオンの繋がりについて、フォウガティはその著書『アメリカのコミュニオン・ユートピア史辞典』(*Dictionary of American Communal and Utopian History*, 1980)の中で次のように指摘している。

Although some communal efforts sought separation from the world

and hoped to found “little commonwealths,” they were often linked to the world or each other by historical accident or common impulse. The Shaker, Harmonist, and Oneida Communities are important not only because they lasted, but also because of their inspiration and guidance to new groups. (239-40)

古いコミューンから新しいコミューンへとその知識が伝えられているのは興味深いことである。こうした傾向が脈々と受け継がれていることが、今日においてもアメリカにコミューンが頻発する一つの要因となっているのであろう。歴史的に見ると、とくに1830年から1860年と1960年代の二つの時代には、アメリカでコミューン建設が活発化しているが、いずれの時代にも、女権拡張や女性解放運動、人種差別問題、産業・工業の発展による物質主義の先行を懸念する動きなど、社会的な変化が起きている。これはフォウガティが指摘するように、コミューンと社会とに密接な繋がりがあることを裏付けるものである。国家を頼りにせず、自分たちの力で理想社会を構築する試みが絶えることなく現在までも続いていることは、ユートピアがその本来の意味である「どこにも無い場所」(no where)であることを皮肉にも実証しているといえる。

宗教とコミューン

一方、アメリカにおける宗教的なコミューンの歴史は、信仰の自由を求めてピューリタンがやって来た1630年に始まったといえる。この時、ジョン・ウィンスロップ(John Winthrop)はピューリタン信徒を目の前にして「キリスト教徒の慈愛のひな型」(“A Modell [sic] of Christian Charity”)の説教を行った。その内容には「マタイ伝」第5章14節「あなたがたは世の光である。山の上にある町は隠れることができない。」(“Ye are the light of the world. A city that is set on a hill cannot be hid.”)に基づくところが如実に表されている部分があるので、それを以下に引用してみよう。

For wee must consider that wee shall be as a citty upon a hill. The eies of all people are upon us. Soe that if wee shall deale falsely with our God in this worke wee haue undertaken, and soe cause

him to withdrawe his present help from us, wee shall be made a story and a by-word through the world. (原文のママ)

これは植民当初のアメリカが聖書に基づく共同体であることをよく示している。ウィンスロップの説教はレーガン(Ronald Reagan)やケネディ(John F. Kennedy)など歴代の大統領によってしばしば引き合いに出されるが、それは、1630年以来、聖書が全ての基本となるアメリカの姿勢が崩れていないことを意味しているに他ならない。

聖書にはたしかにコミュンを連想させるような文言が存在する。宗教的なコミュンを志向する人びとは、それを精神的な支えとして、また聖書に記載されている一字一句が正しいことを確認するために共同生活を始める。「使徒行伝」第2章44節「信者たちはみな一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、それぞれの必要に応じて皆でそれを分け合った。」(“And all that believed were together, and had all things common; And sold their possessions and goods, and parted them to all men, as every man had need.”)と、同じく「使徒行伝」第4章32節「信じる者の群れは心と意思を一つにし、だれひとりその持ち物を自分のものだと主張する者がなく、いっさいの物を共有していた」(“And the multitude of them that believed were of one heart and of one soul: neither said any of them that ought of the things which he possessed was his own; but they had all things common.”)がそれである。

こうした箇所に基づいて宗教的なユートピアを建設した例は数多い。1803年にドイツのヴュルテンベルク(Wurttemberg)からアメリカにやって来た「ハーモニー・ソサイエティ」の指導者ジョージ・ラップは、聖書の文言を文字通り捉えていたので、共同生活について「使徒行伝」第4章32節を引用して人々に説いた。また「オナイダ・コミュニティ」(Oneida Community)の指導者ジョン・ハンフリー・ノイズ(John Humphrey Noyes, 1811-1886)は「マタイ伝」第22章30節の「彼らは娶ることも、嫁ぐこともない」(“they neither marry nor are given in marriage”)という箇所を引き合いに出した。ノイズはこの文言を、全ての男性は全ての女性を愛すべきで、男女間の愛は一人の相手に特定するような利己心や独占欲によるものではないと解釈したのである。したがって「オナイダ・コミュニティ」では全てが共有となった。彼らのように聖書を

字義通りに解釈する伝統は、18世紀におこった「大覚醒」(Great Awakening)や、その後繰り返し行われる「信仰復興運動」(Revivalism)を通してアメリカに根付いている。現在も宗教的コミュンが次々と誕生している事実は、聖書に依拠する姿勢が維持され続けていることを意味しているように思われる。

宗教的土壌の他に、アメリカにコミュンが建設されやすい理由はその土地の広さにある。既に都市化や開発がしつくされたヨーロッパでは、フォウガティが「頑な世界」(“unregenerate world”)と指摘しているように、歴史が古く、社会に受け入れられているものとは異なる信仰や理想を実践することは不可能に近い。アメリカの広大な土地、それも誰もいない、古い伝統や因襲に縛られないフロンティアの存在は、夢を抱いてユートピア建設を目指す人びとには大きな魅力であったといえよう。

コミュンの運営

不特定多数の人びとが集まって小さな社会を作り上げることになれば、当然のことながら、外部の世界から奇異の眼差しを向けられるようになる。それは時に暴力行為や脅迫にまで及ぶこともある。とりわけ取り沙汰されるのが男女関係である。

「オナイダ・コミュニティ」は1848年、ニューヨーク中部のオナイダにジョン・ハンフリー・ノイズによって開設されたコミュンだが、前述のようにここでは全てが、つまり財産も肉体も共有された。また、複合結婚(complex marriage)が試みられ、夫婦関係までが共有された。そうした一種のフリー・ラヴ的な面が世間の非難を浴びることになったわけだが、同時にノイズはバース・コントロールを唱え、女性は妊娠を恐れずに性行為を楽しむようにすべきだとも主張した。イェール大学のキャスリーン・ロンドン(Kathleen London)が述べているように、19世紀中葉にあつてのバース・コントロールということであれば、男性に大きな負担がかかるという“coitus interruptus”や“coitus reservatus”⁽¹⁾などの方法以外には考えられない。そうだとすれば、これは女性にとって評価すべき実践であったかもしれない。

また、1848年といえば、セネカ・フォールズ会議(Seneca Falls Convention)⁽²⁾がニューヨークで開催された節目の年で、これ以降、女性の権利拡大運動が活発化する。そうした時代的風潮に符合させて、ノイズは女性の

立場に立ったパス・コントロールを唱導したようにもとれる。

だがその一方で、ノイズは「優種養殖」(stirpiculture)を実践し、女性を強制的に実験に参加させた。これは科学的根拠に基づいてノイズ自身が選び出した男女に関係を持たせ、子どもを生ませるという実験で、1868年には51人の子どもが生まれたという。この「優種養殖」という用語を造語した本人である彼自身も、このプログラムに参加して別々の女性に10人の子どもをつくった。

こうした特殊な愛のあり方はコミュニン経営上、不可欠なものと考えられる。「オナイダ・コミュニティ」では、世間一般の人びとがごく当たり前に特定の者に対して抱く愛を「個人的な愛」(“special love”)として忌避した。恋愛感情を抱いた特定の男女が親しくすることや自分の子どもに愛情を注ぐことで、他のものに対する愛とに相違が生じてしまう。これがコミュニン崩壊の一因となる可能性があるのだ。そのためにく物質的なもの〉だけでなく、恋愛感情や血縁意識といったく精神的なもの〉にまで共有意識を植えつけることが重要となってくるのである。

このようにコミュニン内ではすべてにおいて私的所有の意識を捨てることが必須となるが、メンバー全員が必ずしもそれを守ることができるとは限らない。事実、「オナイダ・コミュニティ」内では、何人もの男女がこの問題に苦しんだという。組織としてはその対処法を編み出さねばならない。「オナイダ・コミュニティ」では「相互批判」(mutual criticism)という方法が実践された。これは問題を抱えるメンバーが自主的に、あるいは他のメンバーからの要請によって行われるもので、当事者を囲んで座ったメンバーたちがその人物について思うことを正直に告白するというものである。「相互批判」ではコミュニン内の問題すべてが対象になっていたが、一番多く取り上げられたのがやはり男女問題であった。特定の男女間の恋愛は共有をモットーとするコミュニン精神に反するとして批判され、批判の効果が見られない場合には強制的に別れさせて、どちらか一方をコネティカット州ウォリングフォード(Wallingford, Connecticut)の支部へと送ることで問題解決を図ったようである。

おわりに

こうして見てくると、アメリカに誕生したいずれのコミュニンもユートピアの建設という目標を掲げて共同生活を始めていることがわかる。国家に依存せ

ず自らの手で理想社会を築き上げようと試みたり、聖書に記されていることを字義通りに解釈し、その真実性を実証しようとコミュニンの建設に取りかかるといった国民的資質は、現代流に言えば、多くのアメリカ人のDNAに組み込まれているようにも思える。またあれこれと監視されたり、伝統や因襲に行動を束縛されたりすることのない土地の広さや、建国時、いやプリマスに「巡礼始祖」(Pilgrim Fathers)が上陸した時から今日まで育まれてきた、聖書を土台として何ごとも進めるという気風がコミュニン建設の基盤になっているようだ。

短命であったとはいえ、「ヘリコン」を建設したシンクレアも、そうした資質を持ち、またそういった国家的気風を幼い頃から肌で感じ取っていたに違いない。「ヘリコン」は、人びとが共同生活を始めたという点ではコミュニンとして位置づけられるかもしれない。だが、その目的や組織構造に改めて目を向けてみると、アメリカにそれまで存在した多くのコミュニンとは一線を画しているように思えてならない。この点を明らかにすることを今後の課題として、さらに研究を進めていきたい。

註

- (1) <http://www.yale.edu/ynhti/curriculum/units/1982/6/82.06.03.x.html>
- (2) 1848年にニューヨーク州セネカ・フォールズで開催された女性の権利獲得を目指す最初の会議で、アメリカ女性運動の出発点とされている。ルクリーシア・モット(Lucretia Mott, 1793-1880)とエリザベス・ケイディ・スタントン(Elizabeth Cady Stanton, 1815-1902)が会議の発案者となり、彼女たちの呼びかけで奴隷廃止論者や禁酒運動家など男女約300名が参加。会議ではスタントンが独立宣言をもじって起草した「所感の宣言」(Declaration of Sentiments)が採択された。これ以後、女権運動が活発化していくことになる。

参考文献

Fogarty, Robert S. *Dictionary of American Communal and Utopian History*. Westport: Greenwood Press, 1980.

Horwitz, Elinor Lander. *Communes in America: The Place Just Right*. Philadelphia and New York: J. B. Lippincott Company, 1972.

Kanter, Rosabeth Moss. *Commitment and Community: Communes and Utopias in Sociological Perspectives*. Massachusetts: Harvard University Press, 1972.

Kaplan, Laurence. *A Utopia during the Progressive era: the Helicon Home Colony*. *American Studies*, 25, No. 2, pp. 59-73, 1984.

Sinclair, Upton. *The Autobiography of Upton Sinclair*. New York: Harcourt, Brace & World, Inc., 1962.

Webber, Everett. *Escape to Utopia*. New York: Hastings House, 1959.

村田充八『コミュニオンと宗教 ― 一燈園・生駒・講』滋賀、行路社、1999年。
中田幸子『アプトン・シンクレア ― 旗印は社会正義』東京、国書刊行会、1996年。

※本稿はポップカルチャー学会での研究発表「アメリカにおけるコミュニオンの系譜」（2006年9月15日）に加筆訂正を施したものである。